

中期取組目標実現に向けた「三つのプラン」

学校教育目標

「ともに学び ともに高め合い ともにかがやく」  
 ・すすんで学び合い、考えを深める子(知)(開)  
 ・自分も友達も大切に、集団の中で自分らしさを発揮できる子(徳)(公)  
 ・健康に関心をもち、心身共に成長する子(体)

教育課程全体で  
育成を目指す資質・能力

・多様性を尊重して協働する力  
 ・相互に考えを伝え、深め合い、合意形成する力  
 ・自分らしさを発揮しようとする力  
 ・自己実現に向けて、自主的に考え、課題解決をする力

具体化した資質・能力

自分も他者も大切に、多様性を尊重する態度  
 他者との関わりの中で主体的に学び、次の学びに活かす力  
 社会の課題を解決しようとする力

中期取組目標

○「主体的・対話的で深い学び」を通じ、自他を尊重し、まちとともに成長する子どもを育みます。  
 ・SDGs(持続可能な開発目標)の視点を軸に、子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」を通じて、地球の未来を語り合い、すべての人が豊かな暮らしを送ることができる社会の担い手を育てます。  
 ・自分も友達も大切にでき、一人ひとりが自己有用感を持つことを目指した、クラス運営・学年運営、異学年交流等を行います。  
 ・健康な心身をつくるため、家庭・地域と連携し、生活習慣や運動習慣を形成します。  
 ・地域での豊かな体験を通して、まちの一員としての自覚を持ち、まちをよくしようとする態度を育みます。

学力向上アクションプラン

重点取組分野	具体的取組
生きてはたらく知	①SDGsの視点を軸に、日常的な学習を通じて身に付けたことを活かして、教科横断的な「主体的・対話的で深い学び」を通じて課題解決する力を身に付ける。②1人1台端末環境と高速大容量通信ネットワーク環境の活用により、プログラミング教育に重点を置いた論理的思考の育成を協働的な学びを通して実践する。
担当	A重点研

学力向上に関わる本校の状況

①学力に関わる児童の実態  
 横浜市学力・学習状況調査等の結果からは、学力は全体的に横浜市の平均を上回っている。しかし、学習意識、生活意識がやや低い学年もある。学力が高いにも関わらず、自己評価があまり高くない傾向が見られる。また、教科等の学習が好きではないと回答している児童も存在する。

学力が高い要因として、家庭での学習習慣が身に付いている児童が多く、塾や習い事など、学校以外での学習を行っている児童も比較的多いことによる考えられる。一方で、塾や習い事で忙しく、ストレスを感じている児童もいるようだ。学校の学習の中で自己有用感を高められる活動が求められる。

②これまでの学校の取組状況  
 令和3年度から本格的に導入されたGIGA端末を活用し、個別最適で協働的な学びを実践し始めている。令和3年度の重点授業研究として「プログラミング教育」に取組み、児童が課題解決する力を育成し始めている。

駅や商店だけでなく、公園や畑も近くにあり、地域の教育材に恵まれている。一方で感染症対策によって、これまで本校が培ってきた人とのつながりが希薄になりつつあり、再構築していく必要がある。

経験年数の少ない教員が多く、教師力の向上を目指し、組織的に対応する必要がある。

今年度の目標

SDGsやプログラミング教育の学習を通して、学校教育目標である児童の姿や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、協働的な学習の中で論理的な考え方を身につけ、主体的に課題を解決していく力をつける。

目標を実現するための具体的行動プラン

上半期  
 チーム学年経営や教科分担制を生かして、多くの教員の視点の中で児童一人ひとりに最適な支援を提供する。同時に放課後に指導方法について議論を多くすることで教員それぞれが持つ強みを共有し、若手教員のOJTにつなげる。  
 児童の発達段階や個の特性に応じてGIGA端末の活用を進め、プログラミング教育をはじめとした課題解決型の学習を進める。  
 各教科研においてプログラミング教育をどの学年のどの単元で行うのが望ましいか検討を進める。  
 協働的な学習を通して、友達と一緒に課題を見つたり達成したりする中で、一人ではなく複数の友達と学習することの楽しさや達成感を味わうことができる授業を作っていく。  
 各学年では教科横断的な学習を進められるように、前学年以前にすでに学んだことを活かして新たな課題を解決できるような適切な課題を設定する。  
 ESD(Education for Sustainable Development)の概念について職員が学び、SDGsと教育活動と結び付けていく。

下半期  
 発達段階に応じて、子どもたちが身の回りの課題に気が付き、その解決方法を考える。課題解決に、日々の教科等の学習が役立つことを実感する機会を意識的に設け、子どもたちの主体的な学びを引き出す。  
 ICT機器の活用などにより、児童一人ひとりにて個別最適な学びを提供した上で協働的に課題を解決する体験を通じて、多様性を尊重する態度を育む。  
 保護者や地域と連携する場面を意識的に生み出し、地域の教育材を生かした課題解決型の学習の機会を増やす。

豊かな心の育成推進プラン

重点取組分野	具体的取組
豊かな心	①クラス単位だけでなく、学年単位の活動、たてわり活動、クラブ活動、学校行事など多様な集団の中で学習することで、自分を大切に、他者を尊重する態度を身に付ける。②SDGsの視点を軸に、すべての人が心豊かな暮らしを送ることができる社会について考える態度を育てる。
担当	C学習推進

豊かな心に関わる本校の状況

①豊かな心に関わる児童の実態  
 横浜市学力・学習状況調査等の結果からは、学力は全体的に横浜市の平均を上回っているにも関わらず、自己評価があまり高くない傾向が見られる。Y-Pアセスメント(子どもの社会的スキル横浜プログラム)、心とからだアンケートを用いた、教室では把握が難しい児童一人ひとりの実態の把握によると、自己肯定感・自己有用感の低い児童が各クラスにいたることが分かっていく。  
 学習課題や当番活動にまじめに取り組み、家族や教師、友人の期待に応えようと努力している。しかし、忙しさからストレスを抱えることもあり、自己肯定感が低く、積極性や創造性に課題が見られる。

感染症対策の影響により、様々な場面でコミュニケーションを取りづらいう状況が続いており、児童の心の成長に与える影響が懸念される。

②これまでの学校の取組状況  
 感染症対策により、異学年交流や学年単位での学習に制限が多く、給食の時間に班単位で児童が心を通わすことにも大きな制限が設けられている現状がある。

その中でも、テレビ放送を活用した全校朝会やお別れ会などを実施し、集団や社会の一員であることを実感できる機会を継続することができた。  
 司書教諭と学校司書を中心に学校図書館の環境整備を進め、読書活動を充実させた。  
 感染症対策で児童同士が学校生活で触れ合う時間に制限があったため、経験としての道徳性を養うことの難しさがあった。その補充的な役割として、道徳科で各学年や学級の児童の実態に応じた教材で、養育べき道徳性を補った。

今年度の目標

自分らしさを発揮できる機会を増やし自分を大切にできる子を育てる。  
 様々な他者と関わる機会を増やし、他者を尊重する態度を育てる。

目標を実現するための具体的行動プラン

上半期  
 学級内での信頼関係の構築が大事になることから、教師と児童の信頼関係や児童相互の人間関係を育て、一人ひとりが自分の考え方や感じ方を伸び伸びと表現することができるとともに、日常の学級経営の中で作れるようにする。そのために道徳科では、集団でのゲームなどを取り上げたり、一人ひとりの考え方をすぐえる授業を展開したり、「だれもが」「安心して」「豊かに」をめざし人権教育を行う。また、Y-Pアセスメントを活用し、児童個人や学級の状態を把握し、クラス経営に役立てる。  
 感染症対策は継続しつつも、クラブ活動や委員会活動、たてわり遠足など、感染症ガイドラインの中でできる活動を積極的に実施し、多様な集団の中で学習する。  
 総合的な学習の時間等において、SDGsの概念を発達段階に応じて学習し、すべての人が心豊かな暮らしを送るにはどうしたらいいか考える時間を設ける。  
 読書活動を充実させ、表現力や想像力を高め、豊かな感性を育む。

下半期  
 あらゆる学校の教育活動全体の様子や、Y-Pアセスメントから見えてきた児童の課題を把握するとともに、その課題を改善するための取り組みをする。そのために、学習ごよみの見直しや、道徳科の「補充」「深化」「統合」の工夫、内容の選定などに取り組む。また、特別活動での「ペア週間」の異学年交流で、コミュニケーション能力や助け合いの精神を育み、「豊かな心」に向けた教育活動を行う。  
 運動会や校外学習、たてわり活動などを通して、思いやりや共感する心をもち、互いに支え合う態度を育てる。  
 総合的な学習の時間等において、SDGsの概念から考えられる身近な課題について、関わるすべての人にとって心豊かに過ごせるにはどうすればいいかという視点を持って、解決方法を考える学習を実施する。  
 総合的な学習の時間等において、読書活動や調べ学習等で身に付けた知識を課題解決に役立てる経験をしていく中で、自己肯定感・自己有用感を醸成し、多様な他者が活躍する場面を見聞きする中で、他者を尊重する態度を育てる。

健やかな体の育成プラン

重点取組分野	具体的取組
健やかなからだ	①感染症対策を継続するとともに、食育指導などを通じて健康に生活する習慣を身に付ける。②体育や休み時間など、運動の時間を確保するとともに、家庭・地域と連携し、児童が運動に親しむ習慣を身に付ける。③子どもたちの心の健康状態にも留意し、きめ細やかなケアを行う。
担当	D健康・安全

健やかな体に関わる本校の状況

①健やかなからだに関わる児童の実態  
 体力・運動能力調査等の結果によると、総合的な体力は男子は横浜市や全国の平均を上回っており、女子は横浜市よりは高く、全国と同じくらいである。運動が好きな児童も多い。ただ、男女ともに身長が全国平均に比べて高いのに対し、体重は全国平均よりも低く、全体的に痩せている傾向が見られる。

実際には、家庭での習い事などで運動経験豊富な児童とそうでない児童の二極化が見られる。  
 地域に緑道や公園が多くあるが、主に大人がジョギングなどに利用しており、児童が遊具などを使って遊ぶ公園は少ない。  
 高学年になるにつれ、塾に通う児童が増え、睡眠時間が短くなる傾向が見られる。

②これまでの学校の取組状況  
 感染症対策や気候変動の影響により、体育科や休み時間に十分に体を動かすことを制限せざるを得ない状況が続いている。  
 その中でも、体育科では体づくり運動領域を重点領域として、指導の方法を深めてきた。

今年度の目標

感染症対策を継続する中で、できる限り運動機会を確保し、食育や生活習慣を考える機会を通じて健康に生活する習慣を身に付ける。

目標を実現するための具体的行動プラン

上半期  
 気候や感染状況の落ち着いた時期に積極的に体づくり運動領域を重点領域とした体育科の学習を行う。  
 道徳科の集団でのゲームやクラスでのレクリエーション活動などを通して、粘り強くやり遂げる態度、協調性、運動に親しむ習慣を身に付ける。  
 家庭科や給食の時間を通して、栄養やマナーなど食育を行う。  
 学校保健委員会では、「にこにこコミュニケーション～気持ちのいいあいさつしよう～」をテーマに設定し、コロナ禍において心身ともに健康に生活するための相手と円滑なコミュニケーションがとれる方法について、すべてのクラスで考え、報告・実践する。  
 体力テストの結果等を家庭と共有したり、食育日より保健だよりなどを発行するなど、家庭と連携した体力の向上、生活習慣の改善を図る。  
 休み時間に校庭でボール遊びに親しめるようにボールをクラス配当するなど、環境を整える。

下半期  
 運動会では、体育科で培った力を発展させ、新たなことに挑戦し、自ら進んで運動に親しんでいく資質や態度を養う。  
 PTAやおじの会などの企画に積極的に協力し、地域・家庭での運動習慣を児童に身に付けさせる。  
 学校保健委員会では、クラスごとの取組みの振り返りを行い、継続的に「にこにこコミュニケーション」がとれるよう、働きかける。  
 運動委員会で短な週刊を設け、全校児童が体力技術向上を目指し、短なわに取り組む。